

生きることは願うこと

予期しなかったことが早々と身の上にて起きてしまった。心臓病の後遺症のためであるが、寝る時はこのまま目覚めないのでは、目覚める朝はまだ生きていたのか、と繰り返す朝夕となつてゐるからである。予想外の「老い」の到来で、あわてながらも一期一会と心に決めて、身边を対処しなければならなくなつた。

半面、ふしぎにも本当の仕事がこれから始まるのだという実感が胸の中にわいてゐる。そうはいつても、私の心身は本気でことを始めるにはもう弱りすぎている。

先日、大分合同新聞文化賞受賞の村上あやさんのお祝いの会をした。村上先生の神経のいき届いた話しぶり、はりのある若いお声に、十数年も後輩の私はすっかり脱帽した。私は前後三回もあいさつに立つたが、思うことが思うようにいえない自分を発見して驚いた。老いたのだ。

老いとは、身边雑事や心の整理まで無力でも独りで立ち向かわねばならぬ境涯^{きやうがい}。なすすべを失つても、なすべき多くのものが残されてゐる身の上を、老いというので

あろう。

重い心のまま家に帰ったら、いつものように中学の孫息子が来ている。彼は私たち夫婦のために無理をしながら訪ねてくるのである。名前は^だ大。「大ちゃん、おじいちゃんはどう長くはないよ」。孫にぐちをいうのではない。突然、彼を悲しませたくないからだ。「おじいちゃんがいなくなると、困るっ」。ああ、孫よ。なんとという甘美な言葉。愛するお前から、そんなにもあてにされているのか。私の心は沸騰する。生きる源泉がここにある。

しかし、同時に痛烈な痛みが胸を貫く。今は亡き父が「つぐよしよ、わしはもう長生きできない」といったのは四年前。九十をこした父の言葉に私は黙ったままだった。「お父さん、それは困るっ」と、なぜいってあげなかったのか。

(一九八五年十二月九日)